

第I部は美術工芸の「制作」をめぐる諸問題を扱っている。

並木誠士「浅井忠とパリ——近代日本における芸術家の転身をめぐる考察」は、東京美術学校の教授から、一九〇〇年のパリ万国博覧会視察を経て明治三五年に京都高等工芸学校図案科の教授として赴任することになる浅井忠（一八五六―一九〇七）の、ある意味で転身と言ってもよい変化の理由をパリでの体験に求める。早くから洋画を志して「近代」を先取りしていると自負していた浅井が、西洋画の本場に行き、みずからの表現に絶望したことを確認しつつ、アール・ヌーヴォー全盛のパリで見た図案制作にあらたな近代的側面を見出したことこそが、転身の要因であったと分析する。

実方葉子「木鳥櫻谷の写生縮模帖——近代京都における日本画の学習と制作」は、近代京都で活躍をした日本画家木鳥櫻谷（一八七七―一九三八）が残した「写生縮模帖」（公益財団法人櫻谷文庫蔵）の全貌を詳細に紹介することを通して、今尾景年に師事した初期段階からの櫻谷の絵画修業の過程を明らかにする。この作業を通して、当時の京都における運筆重視の指導や如雲社などの場を利用した新古画の縮模の様相、そして、なによりも写生を積極的に起こす櫻谷の姿勢を論じる。また、モチーフとしての虎を例に、本画制作にいたる表現の変化を示し、結果として櫻谷が本画制作の段階で写実表現を意図的に抑制している点が指摘される。

植田彩芳子「太田喜二郎研究——その画業と生涯」は、近代京都の洋画壇で活躍した太田喜二郎（一八八三―一九五二）の、東京美術学校時代・ベルギー留学時代を経て京都で活動するようになって以降の年譜的な事項を丁寧に確認し、そこに画風の展開を重ね合わせる。そのうえで、作風の分析や歴史学者・考古学者・哲学者などのネットワークの様相を明らかにする。太田については、これまで体系的な研究がなされておらず、本論文は今後の研究の基礎となる貴重なものである。

木立雅朗「河井寛次郎と京焼の生産システム——登り窯を「受け継ぐ」意味」は、陶芸家河井寛次郎（一八九

〇（一九六六）の言説をたどり、河井の京都や戦争とのかかわりを掘り下げる。道仙化学陶器所文書、藤平陶芸文書の精査を通して、登り窯の衰退や貸し窯の実態、五条坂における民藝陶器制作の様相などを明らかにする。そして、最後に、窯の廃絶など現代社会において近代美術工芸遺産が直面している問題に言及する。

青木美保子「京都における染織工芸の近代化——写し友禪・機械捺染・墨流し染」は、京都の染織業界が伝統的な製法から徐々に近代化する過程を詳細に追跡する。具体的に取らなければならないのは、写し友禪・機械捺染・墨流し染であり、ここでは、中村喜一郎、廣瀬治助、堀川新三郎、太田重太郎、武田周次郎、八木徳太郎などこれまで無名の個人としてしか扱われていなかった技術者、企業主などが人間として浮かびあがってくる。美術史のみならず技術史、産業史とも捉えることができる論考である。

上田文「水曜会をめぐる考察——竹内栖鳳塾における明治三〇年代後半の新動向」は、日本画家竹内栖鳳（一八六四～一九四二）門下の画家グループが結成した「水曜会」（一九〇三～〇七年）の実態をはじめて明らかにしたもので、栖鳳と弟子たちとの関係や、相互の制作をめぐるやりとりが明確になった。そのなかで、西洋美術受容のあり方、東京との比較意識など、グループが京都画壇確立の方向性を先駆的に試みた様相が示される。機関誌『黎明』の分析、展覧会出品作品の分析もおこなう。

和田積希「『小美術』——その分析と西川一草亭の果たした役割」は、杉林古香（一八八一～一九二三）、津田青楓（一八八〇～一九七八）、西川一草亭（一八七八～一九三八）という若い同人三人が結成した「小美術会」とその発行誌である『小美術』（一九〇四年）を詳細に分析して、同誌を、若い三人が京都の伝統工芸界に突きつけた挑戦状と位置づける。また、三人の図案観や浅井忠とのかかわりを論じたうえで、美術家とは一線を画する華道家としての西川一草亭の立ち位置を明らかにする。『小美術』の特質には一草亭が大きな位置を占めていると同時に、その熱意が早期の廃刊の引き金になったと指摘する。

松尾芳樹「京都市立美術工芸学校の教育課程」は、京都の産業界や行政の期待を受けて、明治一三年に開校したわが国最初の公立絵画学校である京都府画学校から京都市美術工芸学校への教育課程の変遷を追いながら、そのなかで「図案」が次第に重要視されてくる動きを指摘する。そのうえで、近代京都の美術教育が学校（教養）と画塾（専門）によって推進されたという特性を指摘して、東京との相違を明確に示す。

第Ⅱ部は美術工芸の「流通」をめぐる問題を扱う。

山本真紗子「美術貿易黎明期の京都とロンドン——美術商池田清助とトーマス・J・ラーキン」は、美術商として著名な山中商会以前に、海外との交流をもった池田清助（初代 一八三九〜一九〇〇・二代 一八六一〜一九一八）とその周辺にいた稲田賀太郎（一八六八〜？）およびトーマス・J・ラーキン（一八四八〜一九一五）という二名の事績を克明に追跡することにより、明治・大正期における日本美術の海外への流通の実態を明らかにする。とくに、電気技師としてイギリスから雇い入れた「お雇い外国人」であり、帰国後に美術商となったラーキンの業績を具体的に紹介するはじめての試みである。

藤本真名美「谷口香嶠の模写と画譜出版」は、日本画家であり、また、図案制作に注力した谷口香嶠（一八六四〜一九一五）の工芸図案についての考え方を、古器物の図案集出版に着目して論じる。最初の画譜『工芸図鑑』（一八九一年）以来、香嶠が積極的に進め、その特徴ともなった古代模様の普及が、当時の図案集刊行の主目的であった工芸図案の改良に加えて、東京に比べて振るわなかった京都の歴史画への参考資料の提示という側面が強かったという重要な指摘がなされる。

前川志織「雑誌『時事漫画 非美術画報』にみるカリカチュアと図案」は、洋画家であり、浅井忠について関西美術院の院長になった鹿子木孟郎（一八七四〜一九四一）が中心となって創刊した『時事漫画 非美術画報』（一

九〇四年）を分析する。この雑誌の詳細な報告自体がこれまでなかったが、それだけでなく、この雑誌で展開される戲画的表現が図案へと展開していることを的確に指摘している。

加茂瑞穂「明治期京都における染色デザインの開眼——友禅協会応募図案を中心に」は、京都における最初期の図案団体であり、図案家の育成もおこなった友禅協会（一八九二年）が実施した図案募集の様相を明らかにし、それを通して、この組織の特色を読み解き、そこから近代京都の図案のあり方を考える。とくに近年発見された入選図案を紹介して、京都市立美術工芸学校や京都高等工芸学校という教育機関でそれらが図案指導に活用されていた可能性を示唆する。

岡達也「明治期京都における教育機関への海外デザインの開眼——図案集を中心として」は、京都高等工芸学校が明治三五年に開校当初から購入していたヨーロッパの図版および図案集に着目をして、それらの図案や情報流通する過程と、どのように受容されたかを分析する。海外デザインの導入と図案科のカリキュラム、とくに模写教育とのかかわりが指摘される。海外の図版および図案集の受容についてはいまだ詳細な研究がなされておらず、本論文はその端緒となるものである。

第Ⅲ部は美術工芸の「鑑賞」をめぐる問題を扱う。

高木博志「小波魚青「戊辰之役之図」と明治維新観」は、近年発見された小波魚青（二八四四～一九一八）「戊辰之役之図」の画面を詳細に分析することによって、幕府擁護から討幕へと揺れる宇和島藩とその絵師小波の位置づけを明らかにする。それにより、この時期の微妙な歴史意識が明らかにされる。本論文における分析を通して、この絵を鑑賞するものが当時感じたであろう緊張感を追体験できるようにする。

中尾優衣「雑誌にみる近代京都の美術工芸——黒田天外の『日本美術と工芸』をめぐる」は、京都における

美術ジャーナリズムの代表的人物である黒田天外（生没年不詳）が編集・発行した『日本美術と工芸』（一九二一年）を紹介し、それが当時の工芸鑑賞のどのような点を浮き彫りにしているかを分析する。『日本美術と工芸』についてはじめての紹介論文である。ここでは、展覧会の問題、図案への関心などジャーナリストの目で捉えた当時の美術界の様相が示され、また、美術と工芸が渾然一体となっている京都の特殊性が明らかにされる。

三宅拓也「京都商品陳列所と明治末京都の美術工芸」は、明治四二年に設立された京都商品陳列所の意義と意味を分析し、それが他府県のものとは異なり、参考品を見せるだけではなく、制作指導もおこなうなど美術工芸寄りの活動をしていることが示される。また、併設された庭園に関して、京都の造園事業を示すものと位置づける。

田島達也「土田麦僊の画室建設と材木商塩崎庄三郎」は、京都市立芸術大学が所蔵する材木商塩崎庄三郎（一八七一～一九五〇）関係資料のなかから、土田麦僊（一八八九～一九三六）のアトリエ建設をめぐる手紙類を詳細に報告して、画家とパトロンの関係を鮮やかに浮かびあがらせる。とくに、小野竹喬、榊原紫峰との関係も含め、国画創作協会創立（大正七～一九一八年）前後の麦僊周辺の様相が示される。

中川理「武徳殿の建設と国風イメージの波及」は、明治三二年に大日本武徳会が藤原時代風で建設し、全国の武徳殿のモデルとなった京都の武徳殿が大正二年に改修された際に「桃山風」の要素が加えられたことを指摘する。そして、それまで支配的であった「藤原Ⅱ国風」に加えて、この時期に、桃山風の意匠が「もうひとつの国風様式」として建築に採用されるようになった実態を具体的に指摘する。

矢ヶ崎善太郎「茶会の場の考察」は、近代における茶室の変化、つまり、茶室の近代化の促進に美術商が大きな役割を果たしたことを指摘する。さらに、大正一〇年の東山大茶会の分析を通して、古民家の古材や石へのこだわりなど、美術商に加えて、大工や庭師もまた、この時期の茶室形成に重要な役割を果たしていたことが示される。

以上のように、本書は、明治・大正期の京都で制作・流通・鑑賞された絵画、工芸、建築、庭園さらには雑誌や書物など広範なジャンルを扱う。これらの論考を通して、近代京都の美術工芸をめぐる状況がある程度明らかになったと考えている。本書の視点をあらためてまとめると、以下のようなになる。

ひとつは、京都における近代化の様相を明らかにするために、太田喜三郎の基本年譜作成や「水曜会」、櫻谷資料、塩崎庄三郎資料など、多くの新出資料の紹介と分析を積極的におこなっている点である。さらに、これまで紹介・分析されてこなかった雑誌や短期間で廃刊になった雑誌、注目されることの少なかった図案集や図案募集などにも目を向けている。このことにより獲得された知見は大きい。このような新出資料・未紹介資料が多いことは、近代京都の美術工芸についての研究がまだまだ途上の位置にあることを示している。

本書のもうひとつの視点は、人的ネットワークの解明に力を向けている点である。化学者や技術者、パトロンや学者たちなど、美術史の文脈にはこれまでほとんど登場しなかった人びとが、美術工芸家をめぐるネットワークとして浮かび上がっている。

私たち執筆者は、いずれも京都をおもなフィールドとして調査・研究活動を続けている。京都で調査をしていると、近代の美術工芸についてまだまだ新しい作品や資料に出会うことが多い。それだけではなく、調査・研究の対象として貴重な作品や資料が廃棄されたり、破却されたりする現場に遭遇することすらある。十全な状態で保存・管理されているものの方が稀れかと思えるような状況にあって、われわれができることは、まず、そのような作品や資料の継続的な調査・研究であり、さらにそれらの正当な評価、位置づけをすることである。そのため、これからも近代京都の美術工芸に関心をもって、研究を続けてゆきたい。